

乳幼児期における言葉の獲得のための コミュニケーションの重要性について

About the importance of communication for language acquisition

加 藤 茉奈美*

KATO Manami

Abstract:

As we grow up, we humans are the only ones who can acquire many words and languages and build relationships with others through the communication method of conversation. It is the caregivers and nursery teachers such as mothers and fathers who communicate most with their children during this important childhood period when they acquire words and languages. I decided to investigate the importance of communication with parents/guardians and caregivers in early childhood when they acquire words and language. Caregivers may get tired of raising children, but they need to take a break and communicate verbally. It will be important for childcare workers to be close to each child and to be involved so that they can enjoy exchanging words with peace of mind.

キーワード：

乳幼児期 言葉の獲得 コミュニケーション

1. はじめに

私たち人間は成長をしていく中でたくさん
の言葉や言語を獲得していき、「話す（自
分の思いや考えを伝える）」と「聞く（相手
の思いや考えを知る）」というコミュニケー
ション法で他者との関係を築いていくこと
ができる唯一の存在である。このコミュニ
ケーション法をとるには様々な言葉やその
意味を知っていかなければならない。古相¹⁾
は、人間は誕生の瞬間から言語の獲得を始
めると述べている。また、樋上²⁾は幼児の
言語習得（獲得）を観察すると2、3才の
頃から驚異的な速さでことばを習得してい
くと述べており、人間しかできないコミュ

ニケーション法を獲得していくとても重要
な時期といえる。言葉や言語を獲得してい
く大切なこの乳幼児期に一番子どもとコ
ミュニケーションをとるのが母親や父親と
いった養育者や保育士である。筆者自身も
二児の母であり乳幼児期の子どもと関わり、
成長を見守ってきた。本研究は、言語や言
葉を獲得していく乳幼児期において養育者、
保育者とのコミュニケーションの重要性に
ついて調べることにした。

なお、本研究は令和3年度 佐野日本大学
短期大学研究倫理審査委員会の承認を得て
進められた（承認番号第 21039 号）。

*佐野日本大学短期大学 総合キャリア教育学科 Sano Nihon University College Senior Lecturer

II. 言語獲得における重要点

1. 言葉の発達過程

乳幼児期の発達過程について前田³⁾は、生後2か月～4か月くらいになるとクーイングが始まり4か月から6か月の間のクーイングから喃語への移行期を経て、基準喃語へと発達していく。10か月以降になると明確な発音が出て、1歳ごろには初語が出ると述べている。子どもによっては発達に差があるがほとんどの子が述べられている発達過程で成長をしている。

2. 前言語的コミュニケーションと三項関係

内田⁴⁾は発声や指さし、身振り等の前言語的コミュニケーションに注目した関わりが、言語獲得にとって重要であることが明かされている。物(モノ)を媒介に他者と、他者を媒介に物(モノ)と関わるができる「三項関係」の世界の成立が言語獲得の土台でもあると述べている。まだ、子どもが発声しかできない時期に何か気になるものを指さしや見ながら「あー」と発声されると、大人もその物に注目し共有することになる。その際に大人は「○○だね。」や「これは○○だよ。」等、何か声を掛けるだろう。例えば、子どもをベビーカーに乗せて散歩している時に子どもが猫を見つけ指さししながら「あー」と発声する。すると、大人は「ニャンニャンがいるね。」や「猫がいるね。」と声を掛けるであろう。子どもは自分が発声をしたことで、大人が反応し声を掛けてくれることで安心や嬉しさを感じるのではないだろうか。このような三項関係のやり取りは1回で終わるのではなく、物の名前や言葉を覚えていくまで何度も何度も行なわれていく。このやり取りがとても必要とされ重要となっていくと考えられる。

III. 家庭での問題点

近年では、徐々に言葉の発達が遅くなってきているという。前田³⁾は子どもの言葉

の発達を遅らせている要因として核家族化とパソコン、携帯電話、様々なAV機器の普及の2点を報告している。また、古相¹⁾は幼い頃から養育者に言葉かけの不足している虐待を受けた子どもたちは、言語の獲得が遅れている傾向が見られると述べている。身近に頼れる人がいないと、子育ても家事も全て行なうことになり養育者自身の息抜きをする時間が無くなってしまふ。そのため、自身の自由な時間を得る手段としてDVDやスマートフォン等で動画を見せることが考えられる。また、息抜きができないストレスから子どもへの言葉かけが無くなってきてしまうのではないだろうか。筆者自身も振り返ると家事や息抜きをするためにテレビやDVD、スマートフォンで動画を見せることがあった。子どもが誕生するまでは自分の都合で自由に行なうことができていたことも誕生後は子ども優先の毎日となる。ほんの少しの時間でも息抜きをしないと心に余裕が持たなくなってしまう。一日中、動画を見せて言葉かけをしないというのは問題であるが、短時間だけ見せる、子どもが関わりを求めてきた時には子どもに目を向けて十分に言葉かけしコミュニケーションを取るといったことも養育者にとっては必要なことなのではないかと思われる。

また、古相¹⁾はコミュニケーションという観点から言えば、読み聞かせは、絵本を媒介とするコミュニケーションだと言える。保育者と違い、一般の母親は応答のない乳児に対して言葉掛けをすることになれていない。言葉掛けが必要だと言われても、疲れ果てた育児の中で、初めてのという不安の中で、そのような事が普通にできるはずがない。そのような時に、絵本を開いて、赤ちゃんが時折目を向けるような絵本を開いて、何でもいいからお話をしてあげる、いや書いてある通りに読んでもいいし、書いてあ

る通りでなく、自分の心情を声に出して語ってもいいと述べている。絵本には様々な言葉やオノマトベが記載され、乳幼児が興味を引く絵が描かれている。絵本を通すことで重要点にて述べた三項関係が成立しコミュニケーションが取ることができ、様々な言葉やオノマトベに触れ獲得することができると考えられる。

IV. 保育者の役割

保育所保育指針⁵⁾には以下のように記されている。

第2章 保育の内容

1 乳児保育に関わるねらい及び内容

(2) ねらい及び内容

イ 身近な人と気持ちが通じ合う

受容的・応答的な関わりの中で、何かを伝えようとする意欲や身近な大人との信頼関係を育て、人と関わる力の基盤を培う。

(ア) ねらい

- ①安心できる関係の下で、身近な人と共に過ごす喜びを感じる。
- ②体の動きや表情、発声等により、保育士等と気持ちを通わせようとする。
- ③身近な人と親しみ、関わりを深め、愛情や信頼感が芽生える。

(イ) 内容

- ①子どもからの働きかけを踏まえた、応答的な触れ合いや言葉かけによって、欲求が満たされ、安定感をもって過ごす。
- ②体の動きや表情、発声、喃語等を優しく受け止めてもらい、保育士等とのやり取りを楽しむ。
- ③生活や遊びの中で、自分の身近な人の存在に気付き、親しみの気持ちを表す。

- ④保育士等による語りかけや歌いかけ、発声や喃語等への応答を通じて、言葉の理解や発語の意欲が育つ。

2 1歳以上3歳未満児の保育に関わるねらい及び内容

(2) ねらい及び内容

エ 言葉

経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。

(ア) ねらい

- ①言葉遊びや言葉で表現する楽しさを感じる。
- ②人の言葉や話などを聞き、自分でも思ったことを伝えようとする。
- ③絵本や物語等に親しむとともに、言葉のやり取りを通じて身近な人と気持ちを通わせる。

(イ) 内容

- ①保育士等の応答的な関わりや話しかけにより、自ら言葉を使おうとする。
- ②生活に必要な簡単な言葉に気付き、聞き分ける。
- ③親しみをもって日常の挨拶に応じる。
- ④絵本や紙芝居を楽しみ、簡単な言葉を繰り返したり、模倣をしたりして遊ぶ。
- ⑤保育士等とごっこ遊びをする中で、言葉のやり取りを楽しむ。
- ⑥保育士等を仲立ちとして、生活や遊びの中で友達との言葉のやり取りを楽しむ。
- ⑦保育士等や友達の言葉や話に

興味や関心をもって、聞いたり、話したりする。

(ウ) 内容の取扱い

上記の取扱いに当たっては、次の事項に留意する必要がある。

- ①身近な人に親しみをもって接し、自分の感情などを伝え、それに相手が応答し、その言葉を聞くことを通して、次第に言葉が獲得されていくものであることを考慮して、楽しい雰囲気の中で保育士等との言葉のやり取りができるようにすること。
- ②子どもが自分の思いを言葉で伝えるとともに、他の子どもの話などを聞くことを通して、次第に話を理解し、言葉による伝え合いができるようになるよう、気持ちや経験等の言語化を行うことを援助するなど、子ども同士の関わりの仲立ちを行うようにすること。
- ③この時期は、片言から、二語文、ごっこ遊びでのやり取りができる程度へと、大きく言葉の習得が進む時期であることから、それぞれの子どもの発達の状況に応じて、遊びや関わりの工夫など、保育の内容を適切に展開することが必要であること。

このように記されており、保育者も養育者と同じように乳幼児が言葉を獲得していくために重要な存在と言える。保育の中では遊びや歌、絵本の読み聞かせ等、様々な場面でたくさんの言葉に触れることが多いため、言葉のやり取りの楽しさを伝えていく、そしてやりとりを楽しませることが必要と考えられる。

V. 考察

様々なことが発展し便利になっている現代

だが、その分、乳幼児の言葉の発達が遅くなってしまっている。「話す」と「聞く」という人間にしかできないコミュニケーションをとるためには言語や言葉の獲得が必要となり、そのためには他者との言葉によるやり取りが重要だが、Ⅲで述べた問題点、また養育者がエッセンシャルワーカーのため子どもとのコミュニケーションを取る時間が減ってきてしまっているということも考えられる。家庭と仕事の両立に疲れることもある、自分の時間がほしいと思うこともあるだろう。ただ、子どもにとってはとても重要な時期のため、自身の息抜きをしつつ外へ子どもと散歩に行ってきたり花や犬や猫、何か見つけた時に子どもと共有し言葉かけを行なってみる。園への送迎中に前文で述べたことを行なっても良いだろう。また、一日一冊は絵本を読むなど言葉に触れて子どもとのコミュニケーションを取ることが必要だと思われる。保育者は子ども一人ひとりに寄り添い、安心しながら言葉のやり取りが楽しめるよう関わるのが重要となるだろう。

引用文献・参考文献

- 1) 古相正美 (2011年)「乳幼児の言葉の発達と絵本」中村学園大学発達支援センター研究紀要 第2号 pp.37-44
- 2) 樋上勲 (2012年)「言語習得のメカニズムー核心と周辺をめぐってー」大阪観光大学紀要 第12号 pp.81-86
- 3) 前田綾子 (2019年)「子どもの言葉の獲得のプロセスと発語の時期に関する研究」奈良学園大学 人間教育 第2巻 第11号 pp.263-268
- 4) 内田芳夫 (2015年)「小児の言語獲得に関する研究」南九州大学 人間発達研究 5巻 (2015) pp.3-5
- 5) 平成29年告示 幼稚園教育要領 保育所保育指針 幼保連携型認定こども園教育・保育要領 (原本) チャイルド社